

平成 30 年 7 月 26 日現在

機関番号：32644

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2016～2017

課題番号：15KK0057

研究課題名（和文）Embodied Human Scienceの構想と展開（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Embodied Human Science: Ideas and Development(Fostering Joint International Research)

研究代表者

田中 彰吾（Tanaka, Shogo）

東海大学・現代教養センター・教授

研究者番号：40408018

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,700,000円

渡航期間：12ヶ月

研究成果の概要（和文）：Embodied Human Scienceは、自己意識と他者理解のモデル構築を2つの軸としつつ新たな現象学的人間科学の創出を目指すプロジェクトである。この国際共同研究では、自己意識に焦点を絞り、病理的経験との比較からその解明を目指した。具体的には、離人症と呼ばれる精神疾患を取り上げ、その症状に見られる「自己と身体の遊離状態」を当事者の語りに沿って理解することを試みた。明らかになったのは、この症状では、身体所有感が極端に低下して身体が自分のものとして経験できなくなるとともに、身体的経験を俯瞰するパースペクティブへの同一化が強まり、直接経験の実感がない空虚な自己意識が残されるということである。

研究成果の概要（英文）：“Embodied Human Science” is a research project that aims to propose a new framework of human science based on phenomenology of embodiment. In this joint international research, we focused on one of the two major issues of this project: constitution of the reflective self-consciousness. In order to explicate our standard experience of self-reflection, we investigated the pathological experience of self-reflection in depersonalization, in which the patients often report that their sense of self is detached from the body. By analyzing diverse cases of the symptom described by the patients themselves, it is suggested that the depersonalization is an extraordinary experience of self-reflection without tacit feeling of mineness that is normally involved in bodily experiences. Patients’ detached sense of self is mainly derived from the loss of body-ownership feeling.

研究分野：身体性哲学，現象学的心理学，意識科学

キーワード：自己意識 身体化された自己 所有感（sense of ownership） 主体感（sense of agency） 反省的自己意識 フルボディ錯覚 離人症 現象学

1. 研究開始当初の背景

1990年代以降、身体性をめぐって現象学と心の科学（認知科学・心理学・精神医学など）の接点で豊かな議論が繰り広げられ、身体性認知科学を中心とする学際的な研究領域が形成されつつある。この領域で最も活発に論じられてきたトピックに、「自己 (self)」と「間主観性 (intersubjectivity)」がある。

本研究を計画した当時、代表者の田中は、身体性にもとづく間主観性の理論を構想しつつあった。その知見によると、もっとも基礎的な社会的理解（他者理解）は、自己と他者が、互いの行為にもなる意図を直接的に知覚することから始まる。互いの行為の意図を理解しつつ、行為と応答行為が同期して重ねられてゆく過程で、身体的な間主観性が生成し、自己と他者のあいだで一種の自律性を持つ「あいだ (in-between)」の時空間が形成される。自律的に生成する「あいだ」はそれ自体が即興的に生成する規範的な作用を持ち、自己と他者の行為を、その外部に両者が存在するときとは異なるしかたで制御する (Tanaka, 2015)。

この議論をふまえ、しかしそれとは相対的に独立する研究課題として検討する必要性を感じていたことがある。それは、身体性にもとづく基礎的な間主観性を背景としつつ、自己意識や他者理解がどのように洗練されるのか、という主題である。「あいだ」の議論は、一方で、自己と他者に共通のメタ・レベルの観点に立って自己を俯瞰できる心的状態を示唆する。また他方で、想像力を通じて自己の観点と他者の観点を柔軟に往復できる心的状態を示唆している。つまり、身体化された間主観性は、パースペクティブの問題として考えると、自己をメタ・レベルでとらえる反省的な自己意識や、他者と視点を交換することで成立する共感的な他者理解という主題と連続していると思われるのである。

本研究計画の課題名称にある「Embodied Human Science」は、自己意識と他者理解について、それぞれ身体性に基づいて解明することを2つの軸として、新たな人間科学の創出を目指す研究プロジェクトである。

2. 研究の目的

本研究計画では、上記2つの軸となる課題のうち、とくに反省的な自己意識の解明に焦点を当て

ることとした。

理論的に見ると、反省という意識作用には「経験の振り返り」という側面が含まれる。ただし、日常経験に準拠すると、いま・ここで生起している身体的行為としての経験には、必ずしも反省という意識作用がともなわない。たとえば、目的地に向かってただ歩いているような状態では、歩くという身体的行為には反省という明示的な意識作用はともなっておらず、歩行の意図に応じて身体がほぼ自動的に動いているような状態に近い。もちろんこのような状態でも、歩くという行為を引き起こしているのは私であるという暗黙の感じ（主体感, sense of agency）や、歩くという行為が私の行為として生じているという感じ（所有感, sense of ownership）はともなっており、これらが、反省以前の暗黙の自己感 (sense of self) を支えている (Gallagher, 2000)。

ただし、こうした暗黙の自己感が、より明示的で反省的な自己意識へと生成するには、当初の身体的経験に対する振り返りを可能にするような、経験の外部の観点がここに現れねばならない。日常的な事例では、反省は、過去の経験に対して現在から時間的に振り返るしかたで生じるか、あるいは、自己の行為をいわば第三者の観点から距離を取って俯瞰するしかたで生じているであろう。本研究で着眼したのは後者の例である。反省という意識作用が、身体行為のような直接的経験をその外部の観点から俯瞰する要素を含むとするなら、それは潜在的には、他者の観点から自己を俯瞰するという意味でもありうる。

以上のような考察を背景として、本研究では、身体レベルで生じている直接的経験をその外部のパースペクティブから俯瞰する経験が、どのようにして反省的な自己意識を生じさせる基礎になっているのか、という問いを立てた。また、身体経験を外部のパースペクティブから俯瞰する経験それ自体を現象学的に記述・解明することで、この問いに答えることを研究目標とした。

3. 研究の方法

本研究は、ハイデルベルク大学医学部精神科のトーマス・フックス教授との共同研究を意図して計画されたものである。ハイデルベルク大学の精神科は、20世紀に活躍した精神医学者・哲学者であったカール・ヤスパースの伝統を受け継ぎ、現

象学的哲学の方法で精神疾患の症状を当事者の経験に沿って記述する現象学的精神病理学研究の世界的な拠点である。この伝統は 1970 年代をピークにいちど衰退していたが、近年、認知神経科学の発展に呼応する新たな現象学的研究が盛んになりつつあり、その文脈でハイデルベルク大学の知的伝統にも再び注目が集まりつつある。

こうした展開を踏まえ、本研究では、(1)精神疾患の症状と対比しながら日常的な自己意識の構造を明らかにすること、(2)近年の認知神経科学の研究がもたらした知見と対比しながら考察を深めること、を考慮して具体的な研究計画を立てた。申請時の計画では、身体醜形障害と呼ばれる疾患を取り上げる予定だったが、渡航に向けてフックス氏と研究内容について協議する過程で、離人症に研究対象を変更することにした。主な理由は、身体醜形障害では他者から見られるという経験が当事者の反省の経験を左右するように思われる点があり、反省的自己意識ではなく、自己と他者の相互作用に研究の焦点が移ってしまうことが危惧されたからである。

離人症は、次の 4 点を主要な症状とする疾患である (Sierra & David, 2011)。(a)特異な身体経験：自己が身体から遊離している、身体から切り離されている、といった主観的経験をともなう。(b)感情鈍麻：喜怒哀楽の感情が全般的に鈍麻し、喜びや高揚感のようなポジティブな感情だけでなく、恐怖や嫌悪のようなネガティブな感情も感じられなくなる。(c)主観的想起の異常：過去の出来事を思い出すことは可能であり、それが事実であるという認識もあるが、自分の身に確かに生じたことであるという確信がともなわない。(d)現実感喪失：外界の出来事によって心が動かされるという経験が全般的に生じにくく、現実の現実らしさが適切に感じ取れなくなる。

本研究では、書籍として公開されている当事者の手記や記録を集め、主に(a)を中心にして、共通する経験の構造を把握する方法で作業を進めた。また、離人症の身体経験に顕著に見られる特徴として「体外離脱(out-of-body)」という要因があることに着目し、この点を、実験によって引き起こされる体外離脱の錯覚(いわゆるフルボディ錯覚)と比較することにした。フルボディ錯覚は、2007年に最初の実験例が報告され(Lenggenhager et al., 2007) 関連する認知神経科学的な知見が近年

著しく増えている。これと比較して離人症の身体経験の特異性を見つけることができれば、治療の手がかりになるような知見を得られるかもしれない。こうした点も視野に入れて、フルボディ錯覚との比較を理論研究として進めることにした。

4. 研究成果

離人症の症状として現れる特異な身体経験について、先行研究では次の 4 点に整理されている (Sierra, 2009)。(i)身体所有感の欠如：身体が自分のものであるという感覚が感じられなくなる。所有感の消失が全身に広がっている場合、当事者は、自分にはあたかも身体がなくなってしまったかのように感じる。(ii)主体性喪失の感覚：自分が行為の主体であるという感覚が失われる。とくに身体的行為において、自分で身体を動かしている感じがしなくなり、身体が自動的に動いているように感じられたり、以前と比べて動作がぎこちなくなったり感じられたりする。(iii)脱身体感：身体の外部に自分がいるような感じがともなう。自己位置は明確に局所化されているようには感じられないものの、身体の内側に自己がないように感じられる。(iv)体性感覚の歪曲：体性感覚に変化が生じ、ふわふわと宙に浮いているような感じがしたり、手足や頭のサイズとは以前とは違って(大きくなったり小さくなったりしたように)感じられる。

以上 4 つの特徴は、当事者による症状の記録を探っていくとすべて確認することができるが、(iv)については症状の個人差が大きいように思われた。また、宙に浮いているように感じるという全身の感じ方の変化と、手足や頭のサイズが違って感じられるという部位の感じ方の変化を同列に論じてよいかどうか、やや疑問が残った(たとえば、神経科学的に見れば、体性感覚ホムクルスはもとと物理的身体のプロポーションとは違って手足と頭部が肥大している。末梢神経から体性感覚野への刺激入力のパターンが疾患とともに変化するなら、部位の感じ方に変化が生じることは容易に想像がつく。しかし全身の感じ方の変化をそれと同次元の現象として見てよいかどうかは疑問である)。

他方、(i)(ii)(iii)は、現象学的な議論から見て、ミニマル・セルフの障害として共通の構造が個別に現れたものであると考えることができる。ミニ

マル・セルフとは、文字通り「最小の自己」を意味し、時間的な持続を極限まで短く設定して自伝的記憶をすべて除外したとしてもなお残存する自己意識を指す。先に「2. 研究の目的」で述べた通り、ミニマル・セルフは、反省という意識作用を必要とせず、いま・この身体的行為として生起している経験に付随する暗黙の自己感である。ギャラガーによれば、ミニマル・セルフは主体感と所有感から構成されているが、この観点からすると、(i)(ii)(iii)については、何らかのしかたでミニマル・セルフの構成に変化が生じていることで、症状が出現しているように思われる。

当事者の記録を検討しつつ、他方で近年の研究成果を考慮することで本研究が得た結論は、離人症の症状の基礎に、感情の鈍麻と連動する身体所有感の大幅な低下が見られるということである。そもそも離人症においては、主症状のひとつに感情鈍麻が見られるが、感情は身体の生理的状態の変化についての意識として生起する側面を持ち、内受容感覚 (interoception) と密接に連動している。近年、離人症患者は内受容感覚に障害があり、自己の身体内部で生じていることを的確に感じられない傾向があると報告されている (Sedeño et al., 2014)。当事者の記録から確認できるのは、身体所有感が適切に成立しておらず、身体的経験がそもそも「私の経験」という暗黙の意味を持つ経験として生起していないということである。たとえばある当事者はこのように自らの経験を記録している - 「自分の感覚 (五感) が、自分のものではない。欲求や感情にしても然り。いまや、あのいきいきとした生けるすべての感覚、知覚、感情は失われた」(覚, 2007)。

このような身体所有感の欠如が、決して自己意識そのものの消失を意味しないとするなら (実際離人症では自己意識が消失するわけではなくむしろ過剰である) 身体的経験とはやや異なる次元で「私の経験」と感じられる何らかの経験が残存していることになるであろう。脱身体化した状態で自己の行為を観察する経験がこれに当たると考えられる。身体には所有感がともなわないため、身体に由来する経験は「私の経験」としての意味を持たない。代わりに、あたかも身体の外部にあって、行為する身体を観察しているかのような自己の経験が生じることになる。このような経験は、別の文脈では「行為する自己」と「観察する自己」

の分離した状態として記述される (Simeon, 2014)。この記述においても、自己が強く同一化しているのは行為する側ではなく観察する側であり、脱身体化した状態という点では同じ事態を指している。

なお、離人症における主体感について、シエラは、一階の感覚的次元が損傷しているものの、高階の認知的次元が機能しているとしている。つまり、自分の意図で行為しているという実感がいないものの、自分で行為しているという知的な判断は機能しているという理解である。本研究で至った結論はこれとはやや異なる。当事者は、自分で身体を動かしているという「実感」がなかったり、動作が「ぎこちなくなった」と感じたりするのであり、明らかに一階の感覚的側面で変化が生じている。しかしその一方で、運動系に麻痺は生じておらず、自分の意図した通りに日常生活の諸動作を実行することは依然として可能であり、その点では主体感はある一定の範囲で通常どおりに機能していると考えられる必要がある。おそらく (この点は現状では理論的推測の域を出ないが) 当事者にとって、行為開始の時点では主体感とはもなっているものの、運動開始後に固有感覚を通じたフィードバックが帰ってこない、あるいは身体所有感が欠損して自己の運動であることの実感をつかめないうえ、自分で動かしていることがわかっていながらその実感が生じてこないということではないか。つまり、主体感にまつわる感覚的次元の障害は、厳密には主体感の障害というより、主に所有感に由来する障害であるということである。

以上のように、所有感の欠損を核とする離人症の身体経験のメカニズムは、フルボディ錯覚とは基本的に異なる点がある。フルボディ錯覚では、視覚刺激と触覚刺激を適切に組み合わせて視覚優位の統合を一時的に導くことで、視覚野に呈示された仮想身体があたかも自己の身体であるかのような所有感の錯覚が生じる。つまり、身体の所有感を低減させているわけではなく、それを現実の身体から仮想身体へと転移・拡張させることで、自己の身体の外に在るかのような自己位置感覚の錯覚を生じさせているのである。離人症では、身体外部の特定の場所に自己位置感覚が生じるわけではないことを先に指摘した。その点を踏まえてフルボディ錯覚と離人症の身体経験を比較すると、前者は、仮想身体の呈示されている空間的位

置に自分がいるかのように感じる経験であるが、後者は、身体の内側に自分がいるとは感じられないが、かといって明確な位置を自己が持っているわけでもなく、いわば「自分がどこにいるのかわからない経験」として生じている。したがって、当事者がしばしば「夢のなかにいるようだ」と訴えることにも、身体経験との関係で理解可能な背景があるのである。

本研究の成果は要約するとおおよそ以上の通りである。その内容をまとめたものが「What is it like to be disconnected from the body?」と題する論文として、Journal of Consciousness Studiesにまもなく掲載される予定である。

5. 主な発表論文等 (研究代表者には下線)

[雑誌論文](計3件)

- 1) Tanaka, S. (2018). What is it like to be disconnected from the body? Journal of Consciousness Studies, 25, 239-262
- 2) Tanaka, S. (2017). Intercorporeality and aida: Developing an interaction theory of social cognition. Theory & Psychology, 27, 455-472.
- 3) Tanaka, S. (2017). The body as the intersection of between individuality and collectivity. Civilizations, 2017 Special Issue, 128-139.

[学会発表](計17件)

- 1) Shogo Tanaka. Body schema and body image in motor learning: Refining Merleau-Pontian notion of body schema. International Symposium: Body Schema and Body Image, March 25th 2018, The University of Tokyo, Japan.
- 2) 田中彰吾. 現象学と社会構築主義. 国際シンポジウム「社会構築主義と臨床の現場」, 2018年3月21日, 東京大学.
- 3) Shogo Tanaka. Exploring the symptoms of Taijin Kyofusho (TKS) as an embodied experience. 3rd Dialogue between Civilizations, Symposium: Embodiment, Culture and the Self. March 8th 2018, Tokai University European Center, Denmark.
- 4) 田中彰吾. 身体とプロジェクション - 錯覚から考える. 認知科学会・冬のシンポジウム「跳

び出す心, 広がる身体: プロジェクション・サイエンスの確立に向けて」, 2017年12月17日, 青山学院大学.

- 5) 田中彰吾. 離人・現実感喪失における自己と身体. 第47回PPP研究会(精神医学と心理学の哲学研究会), 2017年11月26日, 東京大学.
- 6) Shogo Tanaka. Taijin Kyofusho and the self in Japanese culture. The 17th Biennial Conference of the International Society for Theoretical Psychology, Workshop: Alternative concepts of self, body and mind from contemporary Japanese perspectives. August 25th 2017, Rikkyo University, Japan.
- 7) Shogo Tanaka. Narrative self and its implications for human sciences. The 17th Biennial Conference of the International Society for Theoretical Psychology, Symposium: Focusing on the narrative self in human sciences. August 25th 2017, Rikkyo University, Japan.
- 8) Shogo Tanaka. Psychological experiments as a sort of imaginative variation. The 17th Biennial Conference of the International Society for Theoretical Psychology, Symposium: Quest for New Methods in Phenomenological Psychology. August 24th 2017, Rikkyo University, Japan.
- 9) Shogo Tanaka. Bodily basis of subjectivity and intersubjectivity. The 17th Biennial Conference of the International Society for Theoretical Psychology, Symposium: Locating the Bodily Borders of Individuality. August 24th 2017, Rikkyo University, Japan.
- 10) Shogo Tanaka. Self and body in depersonalization/derealization disorder. Research Colloquium: Philosophy, Psychiatry, Psychosomatic. June 28th 2017, Heidelberg University Hospital, Germany.
- 11) Shogo Tanaka. Depersonalization and full-body illusion: A comparative study of the sense of self. Symposium: From Body to Self in Virtual Reality. May 9th 2017,

- Interdisciplinary Center Herzliya, Israel.
- 12) Shogo Tanaka. The body as the intersection between individuality and collectivity. 2nd Civilization Dialogue between Europe and Japan, Symposium: Individuality-Collectivity and Culture. March 3rd 2018, Tokai University European Center, Denmark.
- 13) Shogo Tanaka. What is it like to be disconnected from the body?: A phenomenological account of depersonalization/derealization disorder. K-seminar at the Centre for Cultural Psychology. February 22nd 2017, Aalborg University, Denmark.
- 14) Shogo Tanaka. Perception and sensation: A reply to Tom Sparrow's text. Workshop: End of Phenomenology and Speculative Realism. November 23rd 2016, Czech Academy of Science, Czech Republic.
- 15) Shogo Tanaka. Reconsidering the self in Japanese culture from an embodied perspective. The 31st International Congress of Psychology, Invited Symposium: An integrative study on the concept of self, body and mind. July 28th 2016, Pacifico Yokohama, Japan.
- 16) Shogo Tanaka. Embodiment and interaction: Two moments of self-awareness. The 31st International Congress of Psychology, Contributed Symposium: In Search of the Self. July 27th 2016, Pacifico Yokohama, Japan.
- 17) 田中彰吾. ミニマル・ナラティブ・インタラクティブ - 自己を考える3つの観点. 第11回 自他表象研究会 2016年7月3日 広島大学 .
〔図書〕(計3件)
- 1) Tanaka, S. (in press). The self in Japanese culture from an embodied perspective. In G. Jovanović, L. Allolio-Naecke, C. Ratner (eds.) The Challenges of Cultural Psychology: Historical Legacies and Future Responsibilities (Chapter 17). London, UK: Routledge.
- 2) 田中彰吾. 『生きられた 私 をもとめて - 身

- 体・意識・他者』北大路書房, 2017年 .
- 3) 田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子 訳, ダレン・ラングドリッジ 著 『現象学的心理学への招待 - 理論から具体的技法まで』新曜社, 2016年 .
〔産業財産権〕該当なし
出願状況(計 件)
名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:
取得状況(計 件)
名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:
〔その他〕
ホームページ等
Embodied Approach (英文)
<https://embodiedknowledge.blogspot.com/>
Embodied Approach (和文)
<https://embodiedapproachj.blogspot.jp>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

田中彰吾 (TANAKA Shogo)
東海大学・現代教養センター・教授
研究者番号: 40408018

(2)研究協力者

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕
Thomas Fuchs (Heidelberg University Hospital, Centre for Psychosocial Medicine, Professor)
〔その他の研究協力者〕
Darren Langdridge (The Open University, Faculty of Arts & Social Sciences, Professor)
Gordana Jovanović (University of Belgrade, Department of Philosophy, Professor)
Luca Tateo (Aalborg University, Centre for Cultural Psychology, Associate Professor)
Shaun Gallagher (University of Memphis, Department of Philosophy, Professor)
Yochai Ataria (Tel-Hai College, Senior Lecturer)